

教職支援センター

信州大学 教職支援センター

Shinshu University

Center for the Teaching Profession



ニューズレター



巻頭言

【教材研究を体験する「理科指導法」(理学部)】

長野県総合教育センターと信州大学の教職支援センターは連携協定を結んでおり、その一環として今年度の前期も理学部の学生51名を対象に「理科指導法Ⅰ」の講座を実施しました。この講座は理科の教員免許取得を目指す学生を対象に、小中高の学校現場で教員経験のある総合教育センターの物理、化学、生物、地学を専門とする4名の専門主事が毎回交代で講師を務めました。

教室に教材を持ち込み、理論から授業実践まで、様々なテーマで11回の講座を教材研究を中心に行いました。写真は、第1回講座の風景です。アルミホイルを箱から引き出して25m提示し、電気が流れるかと発問しました。事象提示で探究心が動き出した学生は様々な予想を立て、意欲的に全員参加で検証実験に臨みました。ここで大事なことは、理論上どうなるかということよりも、自分は何を根拠にして、どのように考えて判断するのか、ということを実感することです。これが教材研究のはじまりです。今の自分から、かつて子供であった自分に戻って、ものごとを感じ考えてみるのが楽しいと思える資質・能力が、理科教師には特に必要だと思います。

さて、この時間ではクラス共通の課題解決に向けて、一人一人が25mでつながったアルミホイルの各部分に自らの手で働きかけて握りつぶし棒状にしたり、ちぎったりして、参加することで成り立つ実験を行いました。自ら手を出し自分事として思考を深めていくことの楽しさを講師ともども味わえました。

他の回でも、雲のでき方に関する演示実験や教材づくりの体験から、実際の授業づくりを学生と一緒に考えました。感想として「モデル実験の大切さが今回身に染みてわかったので、教員になったときには積極的に教材研究をしていきたい」「自分で作成したり、言葉を発したりすることで、インプットとアウトプットが同時に行われ、効果的に知識を身に付けられると思った」等、体験を通しての新たな気付きや発見が、自分なりの言葉で振り返られており、学びの深まりを見とどけることができました。

これからの知識基盤社会では、子供たちばかりでなく教師自身も学び続ける存在、自立した人間として多様な他者と協働しながら主体的、創造的に生きていくための資質・能力が求められます。学生が将来、教壇に立ったとき、この講座での教材研究の体験が生きて働いてくれることを願っております。

長野県総合教育センター

企画調査部長 酒井賢一

教科教育部専門主事 松本俊一



豆電球は点くかな？子供なら、どう考えるかな？



子供は「25mのアルミホイルを全員でギュッと握り潰したので、電気が流れにくくなって、豆電球は暗くなる」と考えるかも？



シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.2 農業高校 ～

長野県更級農業高等学校
農業科 教諭



鎌原 央典 先生

(農学部食料生産学科 平成22年3月卒業)



私は、長野県長野市篠ノ井にある更級農業高校で農業科の教員として勤務しています。本校に赴任して4年目となり、現在は「果樹」を中心に農業科目を担当しています。果樹は、地道な栽培管理が多く、また天候に左右されてしまうことが多々あります。時には雨に濡れながらも、暑くても寒くても、生徒とともに汗を流し、人に喜んでもらえるような果物を作ることが生徒の成長へとつながり、私自身の励みにもなっています。

本校は、2年次に8つのコースに分かれて学習を深めていきます。私が担当する果樹科学コースでは、2年次に長野県4大果樹(リンゴ、モモ、ナシ、ブドウ)の基礎的な栽培管理を学び、夏期休業を利用して地域の果樹農家へ研修に参加しています。地域の方との触れ合いを通じ、農業の楽しさや地域を支える産業への理解を深められています。そして、3年次からはプロジェクト学習として「地域農業に貢献」を目標に、省力化栽培・高品質栽培の検討や地域ブランドの創出に取り組んでいます。どの取り組みに関しても、基礎的な学習を土台に生徒たちで立案・計画から実施・まとめまでを行い、自ら考え、実践できる力を養っています。



近年、農業高校では「農業を学ぶ」ことにあわせて「農業で学ぶ」ことがより重視されています。しかし、ただ栽培するだけではなく、販売活動や農家研修、地域交流を通じて、生徒自身が豊かな人間性を養い、自己有用感を味わうことに繋がっていると思います。農業教育は、時代の変化によって多岐にわたった分野となっています。その中で、どのような教材を選ぶか、活用するかは教員の力量にかかっていると思います。そして、いかに生徒を主役とした授業を展開できるかが重要だと思っています。地域に根ざした教育ができるよう頑張りたいと思います。

長野県南安曇農業高等学校
農業科 教諭

小森 彩加 先生

(農学部食料生産学科 平成26年3月卒業)

私は平成27年長野県の農業科の教員として採用され、大学を出て何も知らない無知のまま現場に立つことになりました。

以前、教師という仕事は、傍目から見ても多忙で、人に物事を教える性格でもない私にとっては、縁のないものだと思っていました。そんな私が、「先生になってみたい」という考えを持ち始めたのは、高校3年生のときです。勉強は好きではなく、運動することしかできなかった私に、学ぶことの大切さや無知の恐ろしさ、やってできないことはないということ、当時の担任や学年の先生たち、そして学校に教えていただきました。高校で勉強をすることの楽しさや、努力することで人生は切り開けるということを実感した私は、子供たちに機会を与えることのできる教員の仕事にやりがいを感じるようになり、今日に至っています。

さて、私の勤務している南安曇農業高校は、県下では少ない農業高校の一つです。本校には、食品加工・草花・果樹などの園芸について学ぶグリーンサイエンス科、畜産や植物バイオ・微生物を学ぶ生物工学科、土木施工や造園を学ぶ環境クリエイト科の3学科があります。その中で、普通校の出身の私は、果樹の教諭として果樹について学びながら、子供たちに指導すると同時に、子供たちからも多くのことを学ぶ充実した日々を送っています。しかし、私としては、授業は教科書通りではなく、季節によって学ぶ内容が決まるなど、農業高校に慣れないことや、なじめない点が多々あります。たとえば、春の草花が活動を始めたころには、「リンゴの摘果やブドウの誘引」について、秋の収穫の頃には、「どのような状態の果実が最もおいしいのか」等々、その日の天気や果樹の管理時期で学習を展開しなければならぬことです。そのため、最初は、農業科の授業に慣れない点もありましたが、3年目になり、慣れないながらも少しずつできることが増えてきました。

今年度は、1年生35名の担任として新鮮な気持ちで、スタートしました。慣れないこともありますが、身の丈に合った範囲で、いまできることに、真摯に向かわなければいけないと感じています。いま担任をしている子供たちが卒業するとき、かすかにでもこの担任で良かったと感じてもらえるよう、できる限りを子供たちに尽くしたいと思っています。恩師に、農業にも教育にも共通していることは、「観る目があるかないか」であるといわれました。植物も子供たちも、観る目を養ってゆきたいです。



教職支援センター 7月～9月の動き

- 教職支援センター運営委員会(7/4)、○長野県総合教育センター連携講座(8/7～8/29)、キャリア教育の理論と実践・障害の理解と支援・教育の思想と歴史・教職論)、○教職教育委員会学芸員養成課程実施部会(8/23)、○CST学都松本フォーラム参加(9/2.3)、○CST山形村通学学舎合宿参加(9/10～9/13)



教育実習を通して感じたこと、学んだこと



最も強く感じたのは「生徒との関わりが如何に大切か」ということです。授業においては、「双方向的な」やりとり、教師と生徒との関わりが充実が求められます。初回の実習では、教師の立場で生徒と関わるのは初めてであったため、この実現がかなり困難であると実感させられました。どのような関わり方(言葉・タイミング等)をするかを考えておくことが求められ、その上で場数・経験によって生徒との関わりを大切にする授業が作られるようになるのではないのでしょうか。また机間巡視が、クラスの雰囲気や学力等に応じて助言をしたり、抽出生徒を決定したりするなど複数の意図をもって行うべきであることも分かりました。一方、授業外では、指導教諭が生徒一人一人を呼び、個別に話を聞く場面が多数見られました。個別指導と捉えたと「説教」的なものが浮かびがちですが、「生徒と向き合う」ことの本質は(全体として生徒を捉えつつも状況・実態に応じて)個人として、一人の人間として向き合うことかもしれない、と考えさせられました。

もう一つ印象に残ったのは、指導教諭の「教育の力ってすごいなと感じた。」と嬉しそうに話す姿です。特別支援のクラスに入り、TTとして参加する機会が何度かありました。初回の授業の後、その中のある生徒の成長について話す様子が今でも忘れられません。心のどこかで私は、特別支援の生徒達は特別支援担当の先生のみが指導をし、それぞれに合った指導に留まるのみだと考えていました。しかし、教師として根気よく生徒と向き合うのは通常クラスの生徒も特別支援の生徒も関係ありません。また指導教諭の言葉のように、「教育の力」を信じ、生徒の成長を喜ぶ姿勢は教師という職に就く者である以上、根拠として持っているべきもの、持ち続けるべきものであると考えます。

教育実習が始まるまで、私はどこかで“国語科”の教師であることに重きを置いていたような気がします。国語を好きになって欲しい、そのためにはその楽しさ・大切さを知らせたい、そう思って教師という仕事を将来の夢として掲げてきました。しかし、それはやはり、後者の「教師」としての自覚・自負が足りないと考えてあったように思います。教師の一番の仕事はもちろん、生徒に教科の授業をし、その力を身につけさせようと努力することであり、そのために高い専門性が求められます。しかし、それに加えて授業内外に関わらず、教育者として「生徒と向き合う」ことが求められます。学習塾とは違い、ただ成績を挙げられれば良いものではありません。学校という一種の共同生活の場で、ぶつかり合ったり、協力し合ったりする生徒を見つめ、叱ったり、褒めたりする必要があります。それは教師が、教科を指導する者としての専門性と、生徒と共に生活し、その学力に留まらぬ広範囲な活動やその成長を促す先導者としての専門性という二つの専門性が求められることだと思います。

(人文学部人文学科日本文学専攻4年 加藤 梨音)



学生からの声



「生徒の主体性を育む夏合宿」を経て～これからの主体性活動を考える～

私はこの度の8月5日、6日に開催された「生徒の主体性を育む夏合宿」に参加させていただき、この合宿を通して「主体性」や「主体性を育む」ということに関して様々なことを考えさせられました。

さて早速ですが、皆さんはこれらを耳にした場合どのようなことを思い浮かべるでしょうか。生徒たちが主体となって何か活動を行い、周りの大人たちはそれを温かく見守る。そして、活動を終えた生徒たちは達成感や充足感のようなものを得て、周りの大人たちはそれを感じて活動の成功を喜ぶ。そんな風景を思い浮かべはしなかったでしょうか。おそらく現在の教育現場等で「主体性」や「主体性を育む」ということを具現化した場合、その多くでこのような活動が展開されているのではないかと私は考えています。少なからず、私が経験してきたものは全てそうでした。そして実際、今回の夏合宿からもこのような雰囲気が窺える瞬間がありました。しかしながら、本当にそれでよいのでしょうか。

まず、主体性活動において生徒たちに「主体性とは何か」を考えさせる場面や、さらに言えば、主体性を育もうとする立場の大人たちが「主体性とは何か」を考える場面の設定が必要であると私は考えています。

「主体性」とは、「自分たちで思考・判断し、行動すること」「リーダーシップの発揮」「協調性」「役割分担」「自・他を律すること」「自分の言動に責任をもつこと」「計画性」などの様々な要素が構成してできているのだと私は考えます。要するに「主体性を育む」とは、このような様々な構成要素となる資質・能力を伸長することではないでしょうか。

こうして紐解いてみると、「主体性」がいかに抽象的な言葉であるかが分かるかと思います。ただ活動するだけでは、得られるのは“中身の無い”達成感と充足感だけです。一度立ち止まって、どんな資質・能力を伸長していくのかについても意識を向けていくべきでしょう。

次に、周りの大人たちが見守っている“だけ”に終わらないということも大切なことではないでしょうか。たしかに、生徒たちだけで全てが完結するのなら理想的ですが、そうでないから“育む”必要があるのです。ヴィゴツキーの最近接領域のごとく、周りの大人たちは適切な支援をしていくべきではないでしょうか。上記で述べた「主体性」を考える場面の設定もその支援の1つでしょう。主体性の名の下の“放任主義”に陥らぬよう注意していきたいものです。

ただし、過干渉になってしまっても主体性を育む意図から外れてしまいます。ここで大事なことは、生徒の頭が“アクティブ”に働いているかどうかです。方向性が見えずにいるならそのヒントを与える。しかし、与えすぎて生徒の思考が停止してもいけない。そのバランスを探り、適切に支援していくことが主体性を育む側の大人たちには求められているのです。

また特に、生徒たちが“自分たちの判断”に基づいて求めた助けは、決して主体的であることに反しないことも生徒・大人の両者が認識していくべきでしょう。人の手を適切に借りていくことも重要な資質・能力の1つなのです。

(理学部数理・自然情報科学科4年 橋本 怜)

編集後記

いよいよ後期が始まりました。とはいえ、秋とは言えないような寒い毎日が続き、つつい挫けそうになってしまいますが…教職の学生さん達は、どの学部でも、活発に発言してくれたり、意見を書いてくれたり。授業のたびに、気を引き締め直すこの頃です。後期も各地での教職相談の時間を設けていますので、何かあれば、学生以外の方もお気軽にお声がけください。

(広報担当 河野桃子)

